

# String-Sign in Left Internal Thoracic Artery Is Associated With Regression in Left Main Trunk Stenosis After Coronary Artery Bypass

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2011-10-20 キーワード: 作成者: 横山, 健 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001297">https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001297</a>

順天堂大学 博士(医学)

氏名 横山 健

論文題名 String-Sign in Left Internal Thoracic Artery Is Associated With Regression in Left Main Trunk Stenosis After Coronary Artery Bypass

(左内胸動脈バイパスの糸状現象は冠動脈バイパス術後の左主幹部狭窄の退縮に関与する)

#### 論文内容の要旨

(背景) 左内胸動脈は長期開存率が良好である事より冠動脈バイパス術に最も多く用いられる血管である。しかし、稀に優位な吻合部狭窄を伴わない、糸の様なびまん性狭窄(糸状変化)を認める事がある。また、単独左主幹部狭窄が退縮する事がいくつかの研究で報告されている。しかし、糸状変化と単独左主幹部狭窄の退縮の因果関係は不明である。

(方法) 我々は後ろ向きに、単独左主幹部狭窄に対して左内胸動脈を冠動脈バイパス術に用い、かつ、術前、術後に冠動脈造影を施行された連続 40 例(男性 31 人 女性 9 人 平均年齢 65 歳)について調査し、術後冠動脈造影の結果によって 2 群(糸状変群 6 名 バイパス開存群 34 名)に分けて比較検討した。

(結果) 患者背景では両群間で有意差は認めなかった。術前の冠動脈造影では、両群の左主幹部狭窄率で有意差は認めず(77.5% vs 76.8%)、観察期間においても同様であった。術後の冠動脈造影では糸状変化群の左主幹部狭窄率はバイパス開存群と比較し有意に低く(41.7±26% vs 82.5±11%  $p < 0.001$ ) 左主幹部狭窄の退縮が有意に多く認められた。また、糸状変化群において左主幹部入口部狭窄が有意に多く認められた。

(結論) 左内胸動脈の糸状変化現象は左主幹部狭窄の退縮、そして特に入口部狭窄に関与する現象の一つであった。